小さな一歩から

エクセレントNPO大賞

優れたNPOを表彰する「第2回エクセレントNPO大賞」（「エクセレントNPO」をめざそう市民会議主催、毎日新聞社共催、丸紅・日本たばこ産業協賛）の大賞に、難民支援協会（東京都新宿区）が選ばれた。部門賞では▽市民賞がプール・ボランティア（大阪市）▽課題解決力賞が多文化共生センター東京（東京都荒川区）▽組織力賞がかものはしプロジェクト（東京都渋谷区）と難民支援協会に決定。社会問題の解決に地道に取り組む受賞団体の活動内容や同賞の意義を紹介する。【井上英介】

受賞式に臨んだNPOの代表ら
＝東京都千代田区で昨年12月6日撮影

NPO大賞概要

2012年創設で今回が2回目（第1回は大賞該当者なし）。NPO法人数は現在4万7000団体を超えるが、多くは経営的な力や市民とのつながりが弱い。そこで模範となるNPOの特色を分析し、10年に「エクセレントNPO（望ましい非営利組織）」の概念を提案、市民性▽社会変革性▽組織安定性の3条件に基づく評価基準を公開した。大賞を目標にNPO同士が競い合い、その動きを市民の目に見えるものとすることで社会に大きな変化を起こすことを目指している。

大賞　難民支援協会
（東京都新宿区）

難民たちの相談に乗るスタッフ＝難民支援協会提供

相談は年間1万件 政策提言も

ここ数年、日本に毎年2000人前後の難民がたどり着き、十分な支援を受けられぬまま厳しい状況に置かれている。協会に寄せられる相談は年間1万件以上で、専門知識を持つスタッフが一人一人へのサポートにあたる。具体的には、難民認定を受けるための法的支援▽医療や住居など当面の生活支援▽難民への職業紹介や子供への学習サポートなどの定住支援――など。さらに、制度改善のための政策提言や調査研究も行う。

大賞に選んだ理由について、審査委員の武田晴人・東京大大学院教授は「組織力に秀でているだけでなく、注目されにくい社会的課題に地道に取り組み、寄付やボランティアを通じた市民参加の機会を作ることにも積極的で実績を積んでいる」と説明する。

協会の石川えり事務局長は、高校時代にテレビでルワンダ難民の過酷な状況を見て支援を志し、1999年の協会設立当初からボランティアとして活躍してきた。受賞式で「外国籍である難民の人たちの自由や人権を守るために活動するが、現状は明るい光が差さない。どんどん falling ってきている。それでも私たちを突き動かすのは難民の人たちの存在だ。彼らに感謝したい」と述べた。

組織力賞
かものはしプロジェクト
（東京都渋谷区）

カンボジアで運営する民芸品工房で働く女性＝かものはしプロジェクト提供

少女たちの傷癒やす

子どもたちが未来への希望を持って生きていける社会を目指す。インドやカンボジアなどで売春宿から少女たちを救出し、カウンセリングやリハビリテーションで傷を癒やす取り組みを続ける。児童買春の防止を目的に、孤児院や警察などとも支援している。

審査委員会は「会費・寄付金の比率は高く、収入基盤が安定。『国際性があり、日本のNPOのモデルとなり得る』と評価する委員もいた」として、村田早耶香理事長は「11年前にたった3人の大学生が始めた活動が、現在は3000人の個人会員に支えられている」と、地道な活動が受賞につながった旨を語った。

課題解決力賞
多文化共生センター東京
（東京都荒川区）

日本語の授業風景
＝多文化共生センター東京提供

外国籍の子の進学支援

国籍、言語、文化の違いを互いに尊重する多文化共生社会を目指す。外国にルーツを持つ子どもたちの教育、とりわけ高校進学支援に力を入れてきた。

審査委員会は「外国籍の子どもたちの不登校やドロップアウトなどに着目し、生活状況などの実態調査で問題を体系的に捉えようとしている。現場に密着した活動から日本の制度や政策への提言も行っている。目の前の問題だけでなく背景を捉え、課題の認識を深めていることが評価された」としている。

主任理事代表理事は「今回の受賞で、日本にも言葉が分からず学校に行けない子供たちがいる、という現実を多くの人々に知ってほしい」と語った。

市民賞
プール・ボランティア
（大阪市）

障害のある子供を水の中で介助する男性
＝プール・ボランティア提供

障害者も「水」を身近に

障害者や高齢者が楽しく安全に「水」に親しめるようプールで支援し、ボランティアが一対一で水泳の指導などを行っている。水泳教師や水上安全法・救急法の指導員、ライフセーバーらが98年に設立した。

市民賞に選んだ理由について、審査委員会は14年にわたり多様な参加者を巻き込みながら着実に活動を続けている。12000人の市民ボランティアがサポートし、基盤は大きい。命に関わる活動だけに研修の仕組みも行き届いている。全国に普及してほしい草分け的なモデル的事業だ」と評価した。

受賞後、織田弱子事務局長は「まだまだ私たちを必要としている方は多く、今後も『泳ぐ社会貢献』に尽力したい」と語った。

審査の過程を公表する

審査委員長
小倉和夫 国際交流基金顧問

エクセレントNPO大賞という名前だが、エクセレントな団体を選ぶというよりは、そうなりたいという意思を持つ方々を表彰する制度だ。この賞がユニークなのは、審査の過程を公表していること。なぜあなたに賞をあげるかの議論を公開する賞はほとんどない。評価される団体や推薦者と審査委員が対話し、それにより審査基準も見直す。審査委員も審査されている。受賞で終わらず、今後も互いに意見を言い合い、NPOのネットワークを作っていってほしい。

講　評

長所を知り弱点の克服を

審査委員
武田晴人 東京大大学院経済学研究科教授

大賞は三つの部門賞受賞者から総合的に優れた団体を表彰するもので、「難民支援協会」を選んだ。判定は僅差で、部門賞や大賞は甲乙つけ難かった。予備審査で全応募団体の書類に目を通した。各団体が使命を自覚し、幅広い市民的な基盤のもと課題解決に取り組む姿に敬服し、もっと多くのNPOを授賞団体に推薦したいと思いを新たにした。大賞は「ゴール」ではない。自らの長所を知るとともに弱点を的確に捉え、組織革新に求められる課題を見いだすツールとして私たちの評価基準を活用してほしい。

市民賞ノミネート団体

多摩草むらの会（東京都多摩市）
福祉の枠を超え社会へ向けて、精神障害者が安心して自立した生活ができるようサポートしている。デイケアに通う精神障害者の親の会として設立され、就労支援や自立生活支援、相談支援などを展開している。

南三陸町復興推進ネットワーク（宮城県南三陸町）
同町の復興プロジェクトをサポートする。震災直後から現地で活動する町出身の若手が設立。若手世代のコミュニティー再生や教育を通じたまちづくりへの貢献、新規事業の研究・開発に関する事業を行う。

ゆめ風基金（大阪市）
地震などの自然災害で被災した障害者の支援を行っている。1995年の阪神大震災を機に設立された。永六輔さんや小室等さんら各界有名人が呼び掛け人として参加している。

子ども劇場千葉県センター（千葉市）
県内の子どもの発達権を保障する生活文化環境づくりを進めている。県内の子ども劇場、おやこ劇場が協議組織をつくって設立。舞台芸術や体験活動の普及推進、子どもの居場所づくりなどに取り組む。

課題解決力賞ノミネート団体

海をつくる会（横浜市）
主に海や磯など水辺の保全活動に取り組んでいる。ヘドロなどで汚れた横浜の海をきれいにしたいとの思いからダイビングを趣味とする有志で設立。海草「アマモ」場の造成や清掃などで水環境の改善を目指している。

放射線医療国際協力推進機構（前橋市）
放射線医療者の教育養成や研究・技術協力を支援し、アジア地域の放射線医療の発展に取り組む。国際機関の活動が援助を求める人々の要望を満たせない現状を踏まえ設立。開発途上国への放射線治療機器や技術書の供与を行う。

POSSE（東京都世田谷区）
労働相談や労働法教育、調査活動、文化企画などを若者たち自身の手で行う。格差に問題意識を持った都内の学生や若手社会人たちが結成。災害の告発にも取り組み、雑誌「POSSE」を通じて発信している。

3keys（東京都新宿区）
全ての子どもたちが、環境によらず十分な教育や支援を受けられる社会を目指す。学習支援が不足していることを知り2009年に学生団体として設立。教育の格差に苦しむ子どもたちへの学習支援や啓発活動に取り組む。

組織力賞ノミネート団体

国際ボランティア学生協会（東京都世田谷区）
学生の熱意や行動力で社会を元気にしていこうとする団体。国士舞大の「夢企画」をきっかけに設立。国際協力▽環境保護▽地域活性化▽災害救援の4分野を軸に活動している。

NPOカタリバ（東京都杉並区）
「生き抜く力を、子ども・若者へ」を理念に活動する教育NPO団体。教育の機会や環境による格差への疑問をきっかけに設立。高校生のキャリア学習プログラム「カタリ場」や被災地の放課後学校「コラボ・スクール」などの事業に取り組む。

環境市民（京都市）
持続可能で豊かな社会を地域から実現することを目指す。リオデジャネイロで国連環境開発会議（地球サミット）があった1992年に設立。エコシティー創出や経済のグリーン化などに取り組む。